

中学生の相談行動を抑制する要因の検討

新見直子・近藤菜津子・前田健一

An investigation of inhibiting factors of consulting behaviors in junior high school students

Naoko Niimi, Natsuko Kondo, and Kenichi Maeda

本研究では、中学生の相談行動を抑制する要因を援助要請行動の生起過程モデル(高木1997)に基づいて検討した。悩み経験の有無と相談経験の有無を組み合わせ、中学生377名を悩み経験あり・相談あり群(97名)、悩み経験あり・相談なし群(118名)、悩み経験なし群(162名)の3群に分類し、相談行動の実行・回避に関する3つの要因(利益、コスト、相談スキル)について群間比較を行った。その結果、悩みがあってもその悩みを誰にも相談しなかった悩み経験あり・相談なし群は、他の2群よりも相談によって得られる利益(悩みが解決する等)を低く評価し、相談することに伴うコスト(悩みを他の人にばらされる等)を高く評価することが明らかになった。これらの結果から、中学生の相談行動を抑制する要因は、相談するためのスキルの欠如ではなく、相談することに伴う利益とコストの認知的評価にあると示唆された。

キーワード：相談行動、悩み、抑制要因、中学生

問題と目的

中学生は、親とは異なる独自の価値観を形成し始め、親よりも自分の考えに共感してくれる友だちとの関係を重視するようになる(榎本, 2003)。それだけに、中学生は友だちとのつき合い方等の対人関係の悩みを抱えることが多くなる(永井・新井, 2005, 2007)。永井・新井(2005)は、中学生の抱える悩みの中で、友だちとのつき合いに関する悩みが最も多く(59.2%)、しかもこの悩みを経験しても相談しなかった者の割合が54.8%と高いことを明らかにした。また、中学生の悩みの種類を一括すると、悩みを友だちに相談する者の割合では女子(46.3%)が男子(27.0%)よりも多いのに対して、逆に相談しなかった者の割合では男子(60.3%)が女子(38.7%)よりも多かった。さらに、相談したいと思ったが相談しなかった者も一定数(男子12.7%、女子14.8%)存在していた。

永井・新井(2005)の結果は、女子が男子よりも悩みを相談する傾向にあることを示すとともに、悩みを相談しない者の中に「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」が混在している可能性を示唆する。「相談したくてもしない者」は、「そもそも相談意図のない者」と比べると、他者の援助を求めているにもかかわらず、その悩みを放置する傾向にあると考えられる。悩みを誰かに相談する等の対処行動を行わずに逃避的な行動をとる者は、イライラや不満が増加したり悩みが深刻化したりする可能性が高いと指摘されている(宗像, 1990)。これらの点から、「相談したくてもしない者」の相談しない理由を明らかにする研究が必要であると考えられる。そこで本研

究では、中学生が対人関係に関する悩みを相談したくてもしないことに関連する要因を検討することにした。

悩みを誰かに相談するという相談行動は、援助要請行動の観点から研究されてきた。援助要請行動とは、個人が他者から、ある種の資源、時間または努力の提供を受けて解決するような悩みや問題を抱えている場合に、直接他者に援助を求める行動である (DePaulo, 1983)。わが国の援助要請行動に関する先行研究 (例えば、岩瀧, 2008; 永井・新井, 2005, 2007) では、高木 (1997) が提唱した7段階の認知判断等から構成される援助要請行動の生起過程

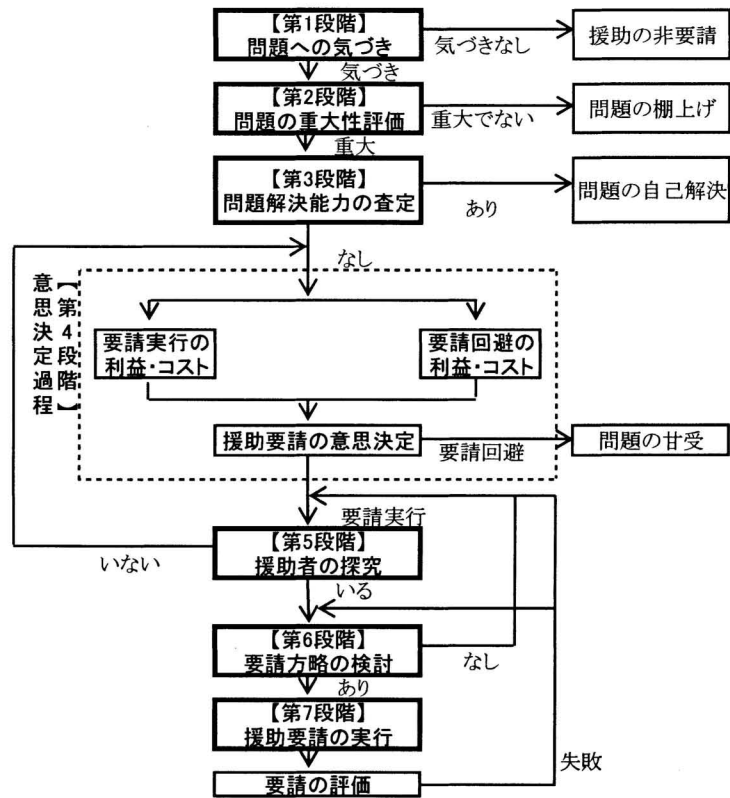


Figure1 援助要請行動の生起過程モデル(高木, 1997を一部修正)

モデル (Figure 1) に基づいて検討を行っている。援助要請行動の生起過程モデルの7段階のうち、第1段階から第3段階は、問題の気づきに始まり、問題の重大性や自分の問題解決能力を評価する過程であり、他者に援助要請するか否かの意思決定を行う前の段階である。それに対して、第4段階から第7段階は、援助要請の意思決定から援助要請行動を実行するまでの過程である。

援助要請行動の生起過程モデル (高木, 1997) の第4段階「意思決定過程」は、援助要請の実行・回避に伴うと予期される利益とコストを評価する段階である。援助要請を実行すると、問題が解決し悩みが解消されるという利益を得ることができる反面、他者に助けられることによる自尊心の低下や無力さの自覚等のコストが生じる。同様に、援助要請を回避した場合には、他者に頼らず自力で問題解決に取り組むことで満足感を得られる可能性 (利益) がある反面、問題を解決できない場合には悩みが持続するというコストを甘受しなければならない。第4段階では、これらの利益とコストを総合的に比較検討し、援助要請を実行するか否かの意思決定を行う。ここで要請実行の利益が要請回避の利益よりも大きく、要請実行のコストが要請回避のコストよりも小さいと判断した場合には、援助要請を実行しようと思決定することになる。それに対して、利益とコストの大きさや関係がこれと逆の場合には、援助要請を回避しようと思決定することになる。第4段階で援助要請実行の意思決定がなされると、次は問題解決にとって適切な援助者の有無を検討する第5段階

「援助者の探究」に進む。身のまわりに適切な援助者がみつければ次の第6段階へ進むが、適切な援助者がみつからなければ前の第4段階に戻って援助要請の意思決定をやり直すことになる。第6段階「要請方略の検討」は、相談するのに適切と判断した援助者に援助要請する際の方略に関する評価を行う段階である。この段階では同時に、選択した方略を実行する能力を自分が備えているか否かの判断も行われる。そして、援助要請の方略が実行可能であれば、最後の第7段階「援助要請の実行」において実際に援助要請、すなわち相談行動を実行するのである。

このモデルに基づいて考えると、永井・新井（2005）で明らかになった「相談したいと思ったが相談しなかった」者は、第4段階から第6段階のいずれかで相談できないと判断したのではないかと考えられる。永井・新井（2007）は、相談行動にかかわる利益とコストの予期度を測る尺度を作成し、第4段階の意思決定過程について検討している。まず、中学生のデータに基づいて因子分析した結果、相談実行の利益に関する「ポジティブな効果」、相談実行のコストに関する「否定的応答」、「無効性」、「秘密漏洩」、相談回避の利益に関する「自助努力」、および相談回避のコストに関する「問題の維持」の6因子が抽出された。次に、男女別の共分散構造分析を使用し、これらの利益とコスト、学校生活満足度および悩み経験が対人関係の悩みに関する相談行動の実行にどのように関連するのかを検討した。その結果、相談行動の実行度には、相談をすると悩みが解決したり気持ちがスッキリしたりする等のポジティブな効果（.34, .38）や悩み経験（.43, .25）が有意な正の関連を示し、悩みを自分で何とかしたいという自助努力（-.26, -.17）が有意な負の関連を示した。これらの結果から、中学生の相談行動には、相談行動の実行に伴うポジティブな側面（利益）の認知的評価や過去に悩んだ経験の有無が強く関連すると示唆される。

これに対して、岩瀧（2008）は、第4段階の意思決定過程だけでなく、第5段階や第6段階にも該当する相談しない理由の項目を含めて、中学生が悩みの相談を抑制する理由について、もう少し幅広く検討している。まず、自力では解決できない対人関係（友人、先輩後輩）に関する悩みを抱えた場合を想定させて、その悩みを誰かに相談すると回答した相談群（57.0%）と絶対相談しない、相談しない、あるいは相談するかはわからないと回答した抑制群（43.0%）に分類した。次に、抑制群の相談しない理由を明らかにするために、悩みを相談しない理由10項目の中から、あてはまるものを複数選択させた。その結果、相談内容の伝え方がわからない（40.7%）、相談しても解決できない（37.2%）、自分のことを話したくない（29.1%）を選択する者が多かった。また、相談できる人がいないを選択した者は9.3%に過ぎなかった。

岩瀧（2008）の抑制群の結果は、「相談内容の伝え方がわからない」（要請方略の評価：第6段階）が「相談しても解決できない」（利益・コスト評価：第4段階）や「相談できる人がいない」（援助者の有無：第5段階）よりも相談行動の回避と関連することを示唆している。このように岩瀧（2008）の結果は、援助要請行動の生起過程モデルの第4段階の意思決定過程だけでなく、第6段階の相談方略やスキルの有無が相談行動の実行・回避に関連することを示唆している。しかし、岩瀧（2008）の研究には次の2つの問題点がある。第1に、抑制群の中には、そもそも相談意図のない者と相談したくてもしない者が混在していることである。両者は、悩みを相談しないと判断する段階が異なると考えられるので、両者を分けて検討する必要がある。第2に、中学生全員を対象にして対人関

係の悩みを想定して回答を求めており、対人関係の悩みを経験した者と経験していない者の回答が混在していることである。相談行動の回避に関連する要因を明らかにするためには、実際に悩みを経験した者のデータに基づいて分析する必要がある。

本研究の目的は、対人関係に関する悩みを相談したくてもしない者が相談しないと判断する場合、援助要請行動の生起過程モデルのどの段階で判断しているのかを明らかにすることである。この目的を達成するために、本研究では悩み経験の有無および悩みを経験したときに相談したか否かに基づいて、悩み経験あり・相談あり群、悩み経験あり・相談なし群、悩み経験なし群の3群を構成する。また、10種類の悩みの中から最も相談しにくい悩みを選択させる場合に、設問で「誰かに相談したいと思うけれど相談しにくいと感じる悩み」という限定的な表現を使用した。したがって、本研究の悩み経験あり・相談なし群は、悩みを経験したことがあり、しかもその悩みを誰かに相談したくても相談しなかった生徒から構成されると考えられる。本研究では悩み経験あり・相談なし群と他の2群との群間比較を通して、悩みを相談したくても相談しない相談行動の回避に関連する要因を明らかにする。本研究では相談行動の回避に関連する要因として、永井・新井（2007）の相談実行の利益とコストの他に、岩瀧（2008）の結果を考慮して、相談スキルの欠如を加えた。岩瀧（2008）では、相談しない理由10項目のうち、「相談内容の伝え方がわからない（40.7%）」（相談スキル欠如に相当）が「相談しても解決できない（37.2%）」（相談実行の利益）よりも多く選択されていた。この結果を参考にすると、本研究では相談実行の利益、コストおよび相談スキルの欠如の3つの要因のうち、相談スキルの欠如において群の主効果に関する説明力（ η^2 ）が大きくなると予想される。

方 法

対象者 中学1年生から3年生の377名（男子136名、女子241名）を対象者とした。

調査時期 2009年9月から10月にかけて調査を実施した。

手続き 調査協力校の教頭に

調査内容と調査実施の承諾を得てクラス単位で調査を実施した。回答者には、回答にあたって正答や誤答はないこと、回答の際に他者と相談しないこと、無記名であるので匿名性が保証されること、回答は任意であるのでいつでも回答をやめられること、を調査用紙の表紙に印刷して説明した。

調査内容 学年と性別に関する質問の他に、以下の4つの質問群を使用した。

Table1 悩みの種類と男女別の人数内訳(%)

悩みの種類	男子	女子
1 自分の容姿や身体の変化で気になることがあるという悩み	16 (11.8)	34 (14.1)
2 なぜかひどく落ち込んだり逃げ出したい気分におそわれる悩み	22 (16.2)	32 (13.3)
3 友だちとのつき合いがうまくいかなかったり、友だちがいないという悩み	9 (6.2)	29 (12.0)
4 学校に行くのがつらくなったり、行きたくなくなったりするという悩み	6 (4.4)	25 (10.4)
5 担任や部活動の先生に対して不満があるという悩み	16 (11.8)	11 (4.6)
6 自分の生活についての悩み	22 (16.2)	26 (10.8)
7 友だちとのつき合いをうまくやるようにしたいという悩み	11 (8.1)	40 (16.6)
8 自分の性や異性との交際についての悩み	23 (16.9)	10 (4.1)
9 学校あるいは学級になじめないという悩み	4 (2.9)	11 (4.6)
10 自分の家庭のことについての悩み	7 (5.1)	23 (9.5)
合計	136	241

1. 悩みの種類：石隈・小野瀬（1997）の心理・社会的悩み 11 項目のうち、1 項目を除く 10 項目を使用した（Table 1）。除外した項目は「委員会活動や班活動で悩みがある」であった。この項目は、石隈・小野瀬（1997）で最も中学生が悩んだ経験が少ないことが報告されているので、本研究の対象者も経験した者が少ないと考えて除外した。選出した 10 項目について、わかりにくいと思われる項目表現を一部修正した。また、全項目の語尾を「～という悩み」という形式に統一した。回答にあたっては、10 項目の中から最も相談しにくいと感じる悩みを一つ選択するよう求めた。なお、Table 1 の 10 項目のうち、項目 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10 の 7 つは対人関係の悩みであり、項目 1, 2, 6 の 3 つは対人関係以外の悩みである。対人関係以外の悩みを本研究で使用するのには、対人関係の悩みについての結果と比較検討するためである。選択された最も相談しにくい悩みに学年や性別による人数の偏りがみられるか否かについて検討を行った。3（学年）×10（悩み）の χ^2 検定の結果、学年によって選択された悩みに有意な偏りはみられなかった（ $\chi^2(18) = 16.73, p = .54$ ）。2（性別）×10（悩み）の χ^2 検定の結果（Table 1）、性別の偏りが有意であった（ $\chi^2(9) = 38.95, p < .001$ ）。下位分析の結果、男子は女子よりも項目 5 と 8 の 2 つの悩みを選択する傾向にあり、女子は男子よりも項目 3, 4, 7, 10 の 4 つの悩みを選択する傾向にあった。

2. 悩み経験の有無：「1. 悩みの種類」で選択した最も相談しにくい悩みを抱えた経験の有無について「経験したことがある」または「経験したことがない」のどちらかを選択するよう求めた。

3. 相談経験の有無：「2. 悩み経験の有無」において「経験したことがある」と回答した者に対して、「1. 悩みの種類」で選択した最も相談しにくい悩みを誰かに相談したか否かについて、「相談した」または「相談しなかった」のいずれかを選択するよう求めた。

4. 相談しにくい理由：永井・新井（2007）の相談行動の利益・コスト尺度 24 項目および水野（2007）の相談スキル（3 項目）の合計 27 項目を使用した。水野（2007）の相談スキル項目は、スクールカウンセラーへの相談阻害に関する項目であったので、相談相手がスクールカウンセラーに限定されないように表記を修正して使用した。回答にあたっては、「1. 悩みの種類」において選択した最も相談しにくい悩みを抱えた場合、各項目についてそう思う程度を 5 段階（1: そう思わない～5: そう思う）で評定させた。

群構成 前述した「2. 悩み経験の有無」と「3. 相談経験の有無」に対する回答を組み合わせ、悩み経験あり・相談あり群（97 名）、悩み経験あり・相談なし群（118 名）、悩み経験なし群（162 名）の 3 群に対象者を分類した。

群	男子	女子
悩み経験あり・相談あり群	23 (16.9)	74 (30.7)
悩み経験あり・相談なし群	38 (27.9)	80 (33.2)
悩み経験なし群	75 (55.1)	87 (36.1)

分類した 3 群間で学年や性別による人数の偏りがみられるか否かを検討した。3（学年）×3（群）の χ^2 検定の結果、学年による偏りは有意ではなかった（ $\chi^2(4) = 1.05, p = .90$ ）。それに対して、2（性別）×3（群）の χ^2 検定の結果（Table 2）、有意な偏りがみられた（ $\chi^2(2) = 14.54, p < .001$ ）。下位分析の結果、悩み経験あり・相談あり群では女子が男子よりも多く、悩み経験なし群では逆に男子が女子よりも多かった。また、悩み経験あり・相談なし群では男女差がみられなかった。

結 果

因子分析 相談しにくい理由の27項目について因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。いずれの因子にも.40以上の負荷量を示さなかった3項目を除外し、再度因子分析を行い Table 3 に示す3因子を抽出した。

第1因子は、永井・新井（2007）のポジティブな効果、無効性、自助努力、問題の維持の4因子に該当する15項目から構成された。「相談すると悩みが解決する」や「相談をすると、悩みの解決法がわかる」等の相談することでポジティブな利益が得られるという内容の項目の因子負荷量が高かったため、第1因子を「相談実行の利益」と命名した。

第2因子は、永井・新井（2007）の否定的応答と秘密漏洩の2因子に該当する6項目から構成された。「悩みを相談しても、それを秘密にしてもらえない」や「相談したことを他の人にばらされる」等の相談することに伴うコストに関する項目の因子負荷量が高かったため、第2因子を「相談実行のコスト」と命名した。

第3因子は、岩瀧（2008）の相談スキルに関する3項目から構成された。いずれの項目も相談するためのスキルがないことに関する内容であるため、第3因子を「相談スキルの欠如」と命名した。

なお、因子分析において除外した3項目は、永井・新井（2007）の問題の維持と否定的応答に該当する項目であった。負荷量が負の値であった項目の得点を変換した後、各因子別に項目平均値を算出し、それを各尺度得点とした。したがって、各尺度得点の得点範囲は1点から5点の範囲にわたる。各尺度得点は、得点が高いほど、最も相談しにくい悩みを相談しようとする際、相談実行の

Table 3 因子分析結果

項目	F1	F2	F3
F1 相談実行の利益 ($\alpha = .92$)			
1 相談すると悩みが解決する	.81	.13	.02
2 相談をすると、悩みの解決法がわかる	.80	.11	.03
3 相談すると、気持ちが楽になる	.78	.07	.09
4 相談をすると、気持ちがスッキリする	.76	-.01	.05
5 相談をすると、よい意見やアドバイスをもらえる	.70	-.10	.05
6 相談すると、相手が悩みの解決のために協力してくれる	.70	-.10	.04
7 相手にアドバイスを言われても役に立たない	-.65	.00	.09
8 相談すると、相手が励ましてくれる	.64	-.08	.12
9 相談をしても、いいことがないと思う	-.62	.06	.18
10 相手に役立つことを言ってもらえるわけではない	-.62	.17	.03
11 困った時は人に頼るより、自分で何とかする方がよい	-.62	.00	-.04
12 悩んでも、人に相談するより自分で解決したい	-.60	-.07	.08
13 相談をしないで一人で悩んでいても、よけい悪くなると思う	.55	.23	.00
14 相談をしても、悩みが解決されるわけではない	-.51	.07	.09
15 相談すると、相手が真剣に相談に乗ってくれる	.51	-.33	.09
F2 相談実行のコスト ($\alpha = .85$)			
1 悩みを相談しても、それを秘密にしてもらえない	.16	.92	-.09
2 相談したことを他の人にばらされる	.18	.89	-.11
3 相談をしても、相手に話を簡単に流される	-.14	.64	.06
4 相談しても、相手に嫌なことを言われる	.04	.63	.08
5 相談をしても馬鹿にされる	-.12	.56	.11
6 相談をしても、相手に話を真剣に聞いてもらえない	-.25	.44	.12
F3 相談スキルの欠如 ($\alpha = .81$)			
1 相談をするとき、自分の気持ちをどう表現してよいかわからない	-.02	-.03	.80
2 相談をするとき、自分の悩みをどのように話したらいいのかわからない	.10	.08	.80
3 相談したいことを、整理して伝えることができない	.00	-.06	.71
因子寄与 (%)	34.90	9.25	5.64
因子間相関	F2	F3	—
	F2	F3	—
	F3	—	—

注) 除外した3項目は、「一人で悩んでいても、いつまでも悩みを引きずることになる(問題の維持)」、「相手に相談をしても意見が合わない(否定的応答)」、「相談をしても、相手が別の意見を言ってくる(否定的応答)」である。

利益、コスト、相談スキル欠如のそれぞれを考慮する傾向にあることを意味する。

群間比較 相談しにくい理由に関する3つの尺度得点の学年差を検討したところ、有意差は認められなかった。そこで、学年を一括して群間比較を行うことにした。はじめに、悩みの種類 (Table 1) を区別せずに、全員のデータ ($N=377$) を使用して3つの相談しにくい理由得点について3 (群) \times 2 (性別) の分散分析を行った (Table 4)。その結果、相談実行の利益において群の主効果が有意となり ($F(2, 371) = 15.19, p < .001, \eta^2 = .08$)、悩み経験なし群と悩み経験あり・相談あり群が、悩み経験あり・相談なし群よりも有意に高かった。相談実行のコストでも群の主効果が有意となり ($F(2, 371) = 7.51, p < .01, \eta^2 = .04$)、悩み経験あり・相談なし群が、悩み経験なし群や悩み経験あり・相談あり群よりも有意に高かった。交互作用も有意であった ($F(2, 371) = 3.30, p < .05, \eta^2 = .02$)。多重比較を行ったところ、悩み経験なし群では男子が女子よりも有意に高かったのに対して、悩み経験あり・相談あり群と悩み経験あり・相談なし群では女子が男子よりも有意に高かった。

次に、最も相談しにくい悩みとして対人関係の悩みを選択した者 ($N=225$) と対人関係以外の悩みを選択した者 ($N=152$) のデータ別に同様の分散分析を行った。対人関係の悩みを選択した者のデータに基づく分散分析の結果 (Table 5)、相談実行の利益で群の主効果が有意となり ($F(2, 219) = 10.19, p < .001, \eta^2 = .08$)、悩み経験あり・相談あり群と悩み経験なし群が、悩み経験あり・相談なし群よりも有意に高かった。相談実行のコストにおいても群の主効果が有意となり ($F(2, 219) = 9.60, p < .001, \eta^2 = .08$)、悩み経験あり・相談なし群が、悩み経験なし群や悩み経験あり・相談あり群よりも有意に高かった。他方、対人関係以外の悩みを選択した者のデータに基づく分析の結果 (Table 6)、相談実行の利益で群の主効果が有意となり ($F(2, 146) = 5.18, p < .01, \eta^2 = .07$)、悩み経験あり・相談あり群が、悩み経験あり・相談なし群よりも有意に高かった。

Table 4 全対象者の各尺度得点の平均値と標準偏差 (SD)

	悩み経験あり・相談あり群		悩み経験あり・相談なし群		悩み経験なし群	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
相談実行の利益	3.60 (0.67)	3.61 (0.68)	3.07 (0.81)	3.05 (0.80)	3.35 (0.67)	3.61 (0.70)
相談実行のコスト	2.08 (1.02)	2.29 (0.75)	2.49 (0.82)	2.68 (0.90)	2.36 (0.63)	2.11 (0.80)
相談スキルの欠如	3.20 (0.93)	3.14 (0.92)	2.93 (0.93)	3.32 (1.01)	2.89 (0.84)	3.03 (0.97)

$N = 377$

Table 5 対人関係の悩みを選択した者の各尺度得点の平均値と標準偏差 (SD)

	悩み経験あり・相談あり群		悩み経験あり・相談なし群		悩み経験なし群	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
相談実行の利益	3.49 (0.73)	3.61 (0.74)	3.07 (0.77)	3.04 (0.74)	3.43 (0.64)	3.67 (0.66)
相談実行のコスト	2.08 (1.26)	2.25 (0.78)	2.58 (0.82)	2.79 (0.78)	2.27 (0.65)	2.05 (0.70)
相談スキルの欠如	3.10 (1.26)	3.13 (0.83)	2.92 (0.87)	3.22 (1.16)	3.03 (0.78)	2.98 (0.96)

$N = 225$

Table 6 対人関係以外の悩みを選択した者の各尺度得点の平均値と標準偏差 (SD)

	悩み経験あり・相談あり群		悩み経験あり・相談なし群		悩み経験なし群	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
相談実行の利益	3.69 (0.63)	3.61 (0.50)	3.07 (0.92)	3.06 (0.87)	3.27 (0.71)	3.52 (0.76)
相談実行のコスト	2.08 (0.84)	2.40 (0.65)	2.31 (0.83)	2.57 (0.98)	2.47 (0.60)	2.22 (0.94)
相談スキルの欠如	3.28 (0.62)	3.14 (1.17)	2.94 (1.10)	3.41 (0.86)	2.74 (0.88)	3.14 (1.01)

N = 152

考 察

本研究の目的は、相談行動の実行・回避に関連すると思われる相談実行の利益とコスト、相談スキルの3要因について3群間で比較し、対人関係に関する悩みを相談したくてもしない者が相談しないと判断する場合にどの要因が強く関連するのかを検討することであった。この目的を検討する前に、本研究に参加した中学生の相談しにくい悩みや相談行動の特徴について χ^2 検定を使用して検討した。まず、悩みの特徴について検討したところ (Table 1)、女子は男子よりも学校における対人関係に関する悩みを最も相談しにくい悩みとして選択する傾向にあった。特に、友人関係に関する項目7「友だちとのつき合いをうまくやれるようにしたいという悩み」と項目3「友だちとのつき合いがうまくいかなかったり、友だちがいらないという悩み」では男女差が顕著であった。それに対して、男子は女子よりも異性や教員との関係に関する悩みを最も相談しにくい悩みとして選択していた。また、悩みの領域別にみると、対人関係の悩みを最も相談しにくい悩みとして選択した者 (男子76名、女子149名) は、それ以外の悩みを選択した者 (男子60名、女子92名) よりも多かった。これらの結果は、中学生の多くが対人関係の悩みを抱えていることを示し、永井・新井 (2005) の研究結果と一致する。

次に、相談行動の特徴について検討した (Table 2)。その結果、悩み経験あり・相談あり群では女子が男子よりも多かったが、悩み経験あり・相談なし群では男女間に差がみられなかった。また、悩みを経験したときに相談をしたか否かについてみると、女子の相談した者 (48.1%, 74名/154名) が男子 (37.7%, 23名/61名) よりも多い傾向にあった。この傾向も、永井・新井 (2005) の結果と一致するものであった。

本研究の目的を達成するため、相談実行の利益、相談実行のコスト、相談スキルの欠如の3得点について3 (群) × 2 (性別) の分散分析を行った。Table 4 からわかるように、全対象者のデータ (N = 377) に基づく分析結果では、悩み経験あり・相談なし群が他の2群よりも、相談実行の利益を低く、相談実行のコストを高く評価することが明らかになった。次に、対人関係についての悩みを選択した者とそれ以外の悩みを選択した者の間でこの傾向が一貫しているか否かを検討した。その結果、対人関係の悩みを選択した者のデータ (N = 225) に基づく分析結果では (Table 5)、全対象者のデータ分析結果と同様に、悩み経験あり・相談なし群が、他の2群よりも相談実行の利益を低く、相談実行のコストを高く評価していた。また、対人関係以外の悩みを選択した者のデータ (N = 152) に基づく分析結果では (Table 6)、悩み経験あり・相談なし群が、悩み経験あり・相談あり群よりも相談実行の利益を低く評価していた。なお、いずれの分析でも、相談スキルの欠如では群の主効果

が有意でなく、群の主効果の説明力 ($\eta^2 = .00 \sim .02$) も相談実行の利益 ($\eta^2 = .07 \sim .08$) や相談実行のコスト ($\eta^2 = .01 \sim .08$) の説明力よりも弱かった。これらの群間比較の結果は、本研究の予想に反して、中学生の相談行動の抑制要因が援助要請行動の生起過程モデルの第 6 段階の相談スキルの欠如よりも、第 4 段階の意思決定過程の利益・コスト評価にあることを示唆する。

最後に、本研究の限界と今後の課題について 3 点指摘する。第 1 に、本研究では中学生の多くが抱えると考えられる対人関係に関する悩みを主に取り上げた。しかし、山口・水野・石隈 (2004) は、中学生の抱える悩みが、対人関係を含む心理・社会的領域、学習領域、進路領域、心身・健康領域等の多領域にわたることを示唆している。したがって、対人関係以外の多様な領域における悩みの相談行動についても抑制要因の検討をしていく必要がある。また、悩みの領域によって相談する相手が異なることも考えられるので、悩みの領域だけでなく相談相手も考慮して検討する必要がある。第 2 に、本研究では永井・新井 (2007) の相談行動の利益とコスト尺度を使用した。援助要請行動の生起過程モデルにおいて仮定されている相談実行の利益、相談回避の利益、相談実行のコスト、相談回避のコストのそれぞれに該当する独立した因子を抽出することができなかった。モデルに基づいて検討を行うためには、モデルで仮定されている要因を測定できる信頼性と妥当性を備えた尺度の開発が求められる。第 3 に、本研究では中学生を対象としたが、他の発達段階 (例えば、高校生、大学生、成人) の相談行動と比較検討する研究が求められる。今後は、相談行動の実行・回避に関連する要因やその関連度について発達的な検討を加えるとともに、相談行動を促す有用な介入方法を開発していく必要がある。

引用文献

- DePaulo, B. M. (1983). Perspectives on help-seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fisher (Eds.), *New directions in helping: Help-seeking*. Vol.2. New York: Academic Press. pp.3-12.
- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達的变化: 友人関係における活動・感情・欲求と適応 風間書房
- 石隈利紀・小野瀬雅人 (1997). スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究: 子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査より 文部省科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 研究成果報告書 (課題番号 06610095)
- 岩瀧大樹 (2008). 中学生が抱える悩みおよび悩みに対する相談相手・相談抑制理由に関する研究—1 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, **17**, 53-68.
- 水野治久 (2007). 中学生が援助を求める時の意識・態度に応じた援助サービスシステムの開発 平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 研究成果報告書 (課題番号 16530423), 3-22.
- 宗像恒次 (1990). 行動科学からみた健康と病気 メジカルフレンド社
- 永井 智・新井邦二郎 (2005). 中学生における悩みの相談に関する調査 筑波大学心理学研究, **17**, 29-37.
- 永井 智・新井邦二郎 (2007). 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影

響の検討 教育心理学研究, **55**, 197-207.

高木 修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, **29**, 1-21.

山口豊一・水野治久・石隈利紀 (2004). 中学生の悩みの経験・深刻度と被援助志向性の関連: 学校心理学の視点を生かした実践のために カウンセリング研究, **37**, 241-249.